

持続可能性教育としての日本語教育の学習のデザイン

—教室活動・シラバスデザイン・教師の役割—

Learning designs for Japanese language education for sustainability
-class room activities, syllabus design, teacher's role-

岡崎 敏雄
OKAZAKI Toshio

This paper presents the following learning designs for classroom activities for Japanese language education for sustainability: 1. learning design for text base activities ;2. learning design for project activities ;3. syllabus design for the contents of Japanese language education for sustainability ;and 4. teacher's role of Japanese language education for sustainability.

1. はじめに

言語教育は、グローバル化の下で変動する世界における持続可能性教育の言語教育の形で、新たな地平を切り拓いている

前稿（岡崎2009 a）では、持続可能性教育としての日本語教育を取り上げ、その具体的な形として以下3点について考察した。：1. グローバル化する世界で持続可能な生き方を追求し、それに必要とされる能力とものの見方の養成を目指す持続可能性教育を、日本語教育の場で実現していくための枠組みである内容重視の日本語教育が、同教育の従来課題をどう克服しようとするものであるか、2. 持続可能性教育の前身である開発教育が長年の懸案としてきた課題をどう克服していくかについて考察し、3. 以上2点の考察の結果を日本語教育の場で実現する具体的な教室活動のあり方を見た。その上で、3の具体的活動として、「学習者調査」、「学習者参画に基づくテキスト作成」に続く持続可能性日本語教育における学習のデザインの目指す全体像を明らかにすることを次の課題として設定した。本論はこの課題をめぐって以下について考察する。

1. 持続可能性日本語教育のテキストベース活動における学習のデザイン
2. 持続可能性日本語教育のプロジェクト活動における学習のデザイン
3. 持続可能性日本語教育の内容面におけるシラバスデザイン
4. 持続可能性日本語教育における教師の役割

II. 持続可能性日本語教育のテキストベース活動における学習のデザイン

テキストベース活動は、前稿で見た学習者参画に基づくテキスト作成によってもたらされたテキストを読み教材として取り上げ、その内容について考え、対話し、書く活動である。その中で、変動の下にある自分の国、自分の国の人々、自分自身、そしてその外につながっている世界のコト、モノ、人と自己との関わりを考えるものである。特に変動下で生きる基盤である雇用、食糧を基軸とするライフラインが動揺している中で、持続可能な生き方とは何かを考え、その基盤を構築していくことを主眼とする。具体的には、次の4つの教室活動がある。

1. 対話的問題提起学習
2. ロールレタリング
3. 4つの問いを考える
4. 学習者の考察のテキストに基づく学習

1. 対話的問題提起学習

対話的問題提起学習は、対話を通して学習者のペア双方が、問題提起用の「テキスト」（文章の意味。教科書の意味ではない）に表された内容について考え、対話をするものである。テキストは、学習者作成のテキストを用いる。また次節以降で述べる「各地域の同世代人について知るプロジェクト」「日本の同世代人について知るプロジェクト」では、テキストは同世代の各地域（日本を含む）の人によって作成されたものである。当学習は、日本語の4技能と考える能力を発動することを通じて、ツールとしての日本語を学習すると共に、内容について考える能力の養成を目的とする。

一連のテキストを使って、対話を積み重ねていく。その中で、グローバル化の変動の下にある自国、自国の人、自分自身についてペアである同世代の人との間で考えを深める。こうして自分たちが直面している状況が、世界のコト、モノ、人とどのように繋っているのかを考え、また考えたつながりを紡ぎ足していく。その過程で、そのつながりの中にある自分がどのように生活したらよいか、他の人とのつながりをどのように持っていけばよいか、またその下で自分とは何なのかについて併せて考えていくものである。

対話のステップとしては、テキストでどんなことが述べられ、どんなことが起きているか、テキストの作者は何を考え、感じているか、その感じ方、問題の設定の仕方についてどう思うか、もし自分が当事者だったらどう感じ、どう行動するかの問いを辿りながら話していく。

進め方として、テキストを3回ほど読み、書かれている事柄、登場人物、情景について具体的なイメージを描き、テキスト作成者自身になったつもりで感じ取る。その上で上記の各問い、その他自分の中に自発してくる問い、テキスト作成者に聞いてみたいと思うような点を箇条書きにリストする。その上で、それらの問いを起点として対話していく。対話が一段落するごとにメモの時間を取り、ノートの左半分に自分の発話、右半分にパートナーの発話のポイントを捉えて書いていく。書く力がまだ十分でない場合は母語で書いたり、あるいは日本語でキーワードのみを

書く。

対話は、上のような流れで進めるが、話の展開によっては話が枝分かれしていくことも重要な過程と捉えて行う。

対話の後に対話後の考察を書く。そこで、対話のステップとして考えた様々な問いの答えが得られればそれを書き、コメントを添える。対話を通して明らかになった点、今まで気がつかなかった自分の物の見方や考え方がある場合にはそれも書く。また、対話相手の人の物の見方や考え方に感じたことがあればそれを書く。特に、ああ、こういうものの見方や感じ方、生き方もあるのだと思ったことがあれば、それも書く。

〔中国人日本語学習者による対話的問題提起学習〕

以下は上で述べた学習者作成テキストの一つをテキストとして、2人の中国人の日本語学習者が行った対話的問題提起学習の結果である（日本語については修正していない）。以下本稿で取り上げる学習者による文章は、いずれも当人の了解を得て掲載する。

テキスト

Aさんは中学校を卒業して、経理専門学校に通っていた。大学に進学しなくても、せめて何かの技能を持っていれば、卒業後は地元で何とかして就職できるだろうと思った。しかし、現実はそんなに甘くなかった。専門学校を卒業した97年頃に、将来のことを考えると、やはり安定した就職を保障してくれる国営企業で働きたいという願望が強かった。しかし、知りようもなかったが、その頃は中国では国営企業の内部で民営化への制度改革が知らず知らずのうちに始めていた（日本語そのまま）。とにかく、安定した職につきたいから、一家総動員でコネを頼ってある国営のホテルで就職することができた。最初は仕事が忙しくて大変だったが、就職ができた安堵感に包まれた日だった。安定した仕事を持っているから、親がずっと心配してくれた縁談の話もうまくいくようになった。新婚生活が始まった早々、就職してから4年目のある日、突然「今後会社は個人営業になるので、皆さんに一定の退職金を払うから、新しい仕事を探して下さい」と言われた。結局、4万円（45万円くらい）の退職金が安定した生活を終わせた（日本語そのまま）。将来の生活に対する憧れが不安に変わった。失業状態で毎日家にいるようになった。よりによってそんな時に、妊娠していることが分かった。夫は仕事をしているし、支給されたお金もあるからとあって、子供を産むことにした。忙しい仕事から解放されたが、決して気は軽くならなかった。子供の養育費もあるし、夫一人の給料ではだんだん家計を支えていけなくなる。子供を親に預かって（日本語そのまま）、アルバイトをし始めた。月500から600元程度の給料だった。その後、バイトが2回も変わった。今20代後半の自分は今後もバイトで生活費を稼ぐか、それとも小さい商売でもいいから、自分で何かをやるかと迷っている。子供の笑顔は今の最高の慰めだ。

対話例

私（自分）	相手（陳さん：仮名）
<p>1. Aさんは再就職考えたかどうか。一応専門的な知識と技能を持っているから、とりあえず、私営企業も考えて、再就職への準備をしたほうがいい。</p>	<p>1. Aさんは気が長い人。安定な生活さえ送れば、それだけで満足できると思う。</p>
<p>2. 現在の中国ではまだ学歴を重視する社会だと思うので、昔の専門学校で学んだ知識だけで、再就職をしにくいかもしれない。</p>	<p>2. Aさんは中学校を卒業した後、専門学校ではなく、大学へ進学するべきだった。そうしたら、再就職の道も広がるだろう。</p>
<p>3. Aさんの場合は小さい商売をすることによって、現状が改善できるかもしれない。しかし、商売をすることによって必ずお金が入ってくるわけではない。様々な原因で、失敗したり、損したりする場合もありえるだろう。もしそうだったら、Aさんの生活を現在より更に困難になると考えられる。</p>	<p>3. 高い目標を持って人生を進むことがよく言われるが、目標がはっきりしすぎて、単一の方向に思い込み、間違って選択をしてしまう場合もある。</p>
<p>4. 私はAさんだったら、夜の時間を使って、夜間大学を通い、或いは一つの資格を習得するつもりだ。就職への再出発のために、まず、自分の知識と能力をつける必要があると考えている。</p>	<p>4. 昔、彼女は国営企業で働いていた。国営企業は国からの保障があるので、仕事を頑張らなくても皆と同じ金額の給料がもらえるとよく言われる。彼女もきっとその時には、レイオフされることとか、失業とか考えていなく、のんびりの生活をしてきただろう。そして、その生活を慣れて、競争意欲も段々弱くなると思っている。</p>
	<p>5. このまま続くと、Aさんは時代の流れに取り残されるかもしれない。</p>
<p>考察</p> <p>Aさんの問題を中心に私とパートナー陳さん（仮名）の発言の比較をみていくと、注目点がそれぞれ違っているが、同じのところもある。</p> <p>Aさんの現状について、自分の場合「小さい商売をやるより、自己自身の能力を高め、再就職を勧める」と考えている。陳さんは「国営企業の状況や環境を分析しながら、Aさんの生活方式と性格への影響」に注目している。学歴については二人とも、中国で就職するつもりなら、やはり、大学卒業まで進学したほうがいいと主張する。</p>	

日本の場合には、子供が独立してから、旅行に行ったり、いろんな教室に参加したりして、自由自在な生活を送る老人がかなり多いが、それに比べると、中国では孫の世話をすることが何より楽しい事だと考えている老人が多い。だから、個人の提案として、Aさんは、暫く子供を親の所に預かって、昼間はバイトしながら、夜は何かの専門技能や知識を習得したら、再就職をすべきだと思う。

ここには、日本語学習者二人にとって変動下の同時代に生きる場を共有する人（Aさん）の状況、当人が感じたこと、考え、行動、今後の生き方に対して、各人なりに受け止めた結果が言語化されている。また、この二人が互いに時代と生きる場を共有しながらも、固有の注目点を持ち、それを対照することで自分自身の見方の特色を改めて知り、自分と異なる見方、生き方に接する機会を得る場となっている。対話的問題提起学習はこのような学習経験を通じて、変動下の状況に対する生き方の自他のレパトリーを繋ぎ、拡大して行くことを目指す学習のデザインである。

2. ロールレタリング

ロールレタリングは、相手として設定した人に宛てて、話しかけるつもりで手紙形式で文章を書く。持続可能性日本語教育で相手として取り上げるのは、学習者参画テキストの作成者である。同世代の人々の作成したテキストとして、テキストに書かれた具体的な内容の細部の状況をできるだけ丁寧に想像しながら行う。

長さは自由である。内容は、相手の人の状況に対する、共感する点、自分なりに感ずること、自分が当事者だったらどんなことを感じ、どんなことに迷ったか、何を基準に「選択」したか、について書く。またその人に尋ねたいこと、例えば、「なぜ」、「いつ」、「どのように」テキスト中の行動をとったのか、などについても書く。

その後、相手の人つまりテキスト作成者になったつもりで、学習者自身に宛てて返信を書く。返信の際は特に相手の状況を具体的細部までイメージしながらその人にできるだけ近づいた感じ方、考え方を自分の中に再現して行う。その人の起床時から就寝時までの様子、季節、気分、体調などや、自分がその場に置かれたらどう感じるか、どうしたかなどをイメージしながら行う。

これらを通して自分以外で自分と同じような現在の変動の下で生きている他の人の状況を、自分のものとして考え、感じ、理解することを通じて、その状況に即した「持続可能な生き方がどのような形で可能なのか」という問いを辿る。次の例は、上の「Aさん」のテキストについて対話的問題提起学習をした「私」に当たる人が（ここでは仮の名前「宋」）が、Aさんを「徐天さん」と見立てて書いた手紙と、その徐天さんからの返信の形で書いたロールレタリングの結果である。（日本語は原文のままである。）ロールレタリングは、これだけを独立して行う場合と、上記の対話的問題提起学習を行った後、自分なりの考えがまとまった所で進める場合がある。

[中国人日本語学習者によるロールレタリング]

徐天さんへの手紙（注「徐天さん」はこの手紙の作者の命名による仮の名。）

天ちゃん

元気になっているか。天ちゃんに手紙を書くのは本当に久しぶりだね。そうだ、この前の同窓会は来てなかったよね。私はすごく楽しみにしていたのに、天ちゃんが来なかったから、なんか寂しかったわ。

同窓会のときに、美奈ちゃんとおった。彼女から君のことを聞いた。子どもを出産したよね、おめでとう。やっぱり天ちゃんらしい作風だ。だって、学生の時代から子どもが大好きだもんね、でも、子どもが可愛いけど、これからの育児と子どもの教育費は大変かもしれない。もうママになったから、ちゃんと計画を立たないとだめよ。

ところで、就職はどうだった。うまく進んでるかしら。もし時間があれば、うちの大学の夏休みの間に、社会人向けのパソコンの養成講座を行っているのよ、参加してみないか。結構評判がいい講座だよ。最後の日には「就職指導」という特別な講座もを行う。去年、妹も参加した、お陰でその後〇〇会社の面接が見事に合格したのよ。その講座を担当の先生はアメリカへ転勤のため、もしかして今年が最後になるかも。夏休みの2ヶ月間をしっかりと勉強したら、絶対に再就職に役に立つと思うわ。天ちゃんもしその気があったら、遠慮なくいつでもいいから連絡してくださいね。

では家族の皆様に宜しく。お元気で。

宋（仮名）より

6月10日

徐天さんからの返信

宋ちゃん

久しぶりだね、宋ちゃんは元気かしら。自分のことについて何も言ってなかったけど、日本の生活もう慣れたかなあ〜。手紙を確実にもらったのよ、ただ、最近の子供の病気のことで忙しくて、なかなか落ち着いて手紙を書く時間がなかったのよ、返信が遅れてすみませんね。

この前同窓会に行かなかったこともここで謝る。ごめんね。本当に宋ちゃんと美奈ちゃんを会いに行きたかったけど、一人300元を出すとされたから、今の経済状況を考えると、手元にその余裕はなかったので、結局は行かないことにした。

実は、この前は家の旦那と相談して、親戚から借金して、ずっと憧れの花屋を開こうと決めた。最初はすべて順調に進んで嬉しかったけど、店舗を契約する直前、子供は緊急入院して手術した。入院の費用を払うため、借りたお金をほとんど使い切ってしまった。もういままさ、自分の店を持つことをあきらめるしかなかった。退院して、子供は親に預かってもらい、私たち夫妻は昼も夜もなく仕事とバイトを繰り返して、借金を返そうと必死になった。君の提案は嬉しいが、今はとても無理だと思う。ありがとうね、宋ちゃんといろいろ話をして少し元気を出したよ。ごめん、子供を泣いているから、今日はこのへんで、また手紙をくださいね。

バイバイ、宋も元気で。

徐天より

6月13日

ここでは、国営企業の民営化が全国レベルで進み、生活基盤が変動する中、生きる場を共有する人に対して、状況をどのような受けとめ、そのような状況の脱却に如何なる方策が可能かを模索しアドバイスの形で表現していることが示されている。

3. 4つの問いを考える

「4つの問いを考える」とは、グローバル下の変動の下にある自国、自国の人、自分自身、そして世界の同世代の人たちにとって持続可能な生き方とは何かを、次のような4つの問いを手がかりに考えていこうとするものである。

1. 世界はどうなっているか：自分の身近な状況、そして自分の国、そしてその先につながっているいろいろな世界の地域や人々に、この10年をきっかけにどのような変動が起きているかについて情報を収集し、それについて自分なりの考え方の枠組みを形作りながら考えるものである。そこでは、自己を起点として、世界のコト、モノ、人のつながりを紡ぎ出していく。すなわち、取り上げるコト、モノ、人を、自分にとって切実な問題と関連付けることで、世界が自分にとって実感を伴ったものとして姿を現してくるベースを形作っていく。
2. その中でどちらに向かって歩いていくか、どのように生きていけばよいか：上のように捉えられた世界のつながりの中で、自分も直面している雇用や食糧の問題について、どのような選択していけばよいか、また長期的な展望の下にどのようなライフスタイルで生きていけばよいかを考える。
3. 他の人とどのような関係を持っていくか：上のように生き方を探るにあたって、そこに関わってくる人々と自分はどのような点でつながっているのか、どのようなつながりを持っていけばよいか、どのようなリスクを共有しており、どのような希望や困難を分かち持つていくかを考える。
4. 私とは何か：上のようなものとして捉えた世界の下で、上で考えたような生き方をとり、他の人とのつながりを考えているこの私とは何なのかについて改めて考える。

「4つの問いを考える」を通して持続可能な生き方を考えることで、開発教育で長期にわたって問題となっていた「学習対象として取り上げる状況」が他人事になってしまう点の克服を図る。世界の様々な状況を考えていくに当たって、他ならぬこの私もまたおかれると感じられる状況を起点とし、それとの関連で世界のコト、モノ、人について考え、自分とは何か、自分とそれらの人々の持続的な生き方とは何なのかを考えることによって克服を図るものである。具体的には、コースのそれぞれの時点で4つの問いを考える機会を持ち、パートナーと対話しながら、考える点を言語化し、文章化して問いに対する答えをまとめる。

次の例は、モンゴル出身、中国出身の留学生が「4つの問い」について考えたものである。

[モンゴル人日本語学習者Aの考えたこと]

1. 世界はどうなっているか：

モンゴルでは、基幹産業の遊牧が民営化され、国営の下での終身雇用が終止符を打った。また遊牧民のための獣医サービス、家畜を養うための牧草用井戸の管理、検疫、が民営化されて負担が大きくなり、遊牧民のコミュニティは続々と解体している。このため、多くの人たちが首都ウランバートルに流民として流れ、ストリート・チルドレンなどを生み、人口の半分が首都に集中するようになっている。このような人たちのほとんどが3Kの労働を担うような産業構造となっている。基幹産業の遊牧事業がこのようにだめになって、毛皮の輸出国であった国なのに輸入国になっている。この結果、大きな企業がまだなく、就職難である。

2. そこでどのように生きていくか：

自分の専門の技を鍛える。できれば日本語教育の道を進みたい。

3. 他の人とどんな関係をつくっていくか：

自分の専門の関係だけでなく、他の分野の人たちとも自分なりのネットワークを作っていく。

4. 自分とは何か：

専門を身につけるため一生懸命勉強している自分。

[中国人日本語学習者Bが考えたこと]

1. 世界はどうなっているか：

グローバル化の影響で、国際競争の中で勝ち抜くため、中国でも近年、非正規雇用が急激に増えてきた。大学の拡大とともに新卒者の就職難も激しさを増している。多くの学生が自分の価値を高めるため、大学院に進学なり、海外留学なり、更に高学歴を追求する。しかし、近年、就職難は海外から帰国した留学生にも及んでいる。かつて海外留学帰りは「海亀」ともてはやされ、厚待遇で迎えられたものであったが、今ではすっかり「海草」になっているとされている。

2. その中でどちらに向かって歩いていくか：

帰国後、海草にされないように、今のうちにしっかりと自分の専門知識を深め、研究能力を高めていく。また国内の就職状況、特に自分と関連の大きい就職の状況を常にチェックし、万全な準備をする。

3. 他の人とどんな関係を作っていくか：

国内の友達との関係を維持しつつ、日本で知り合った友達とのネットワークも大事にする。特に自分の専門の人とのネットワークを積極的に作っていく。

4. 自分とは何か：

専門家になるための修行中である自分。

4つの問いを一まとまりの文章にした別の中国人学習者による次のような例もある。

[中国人日本語学習者Cの考えたこと]

自分は仕事をやめて日本への留学を決心した時は、周りから「皆が望んでいる安定した仕事を手放すのはもったいないじゃないか」という反対の声はあったものの、「目標を持って自分のやりたいことをちゃんとやって、悔いのない選択をすればいい」という応援の声もありました。確かに一度得た仕事を手放すのは勇気が要りました。なんと言ってもそれは自分の生活を保障してくれるはずのものでした。留学の道を選んだ自分は、より世界を見て、そしてより多くのことを勉強するという目標を持って、一人の修行者になりました。同世代の友達の事を見れば、ずっと安定した職場にいて高収入を得ている人もいれば、何らかの理由で転々と転職している人もいます。自分にとっては、安定した就職を得て、親方日の丸感覚を持っていた時期もあったが、それを自主放棄した後に、これからはどう歩いていくかという不安がないと言えば嘘になります。でも、自分は後悔していません。これからは後悔はしないでしょう。自分の中で頑張る目標があったからこそ、今の道を選んだわけです。仕事が安定であろうと、不安定であろうと、自分のことをまず分かなければならないと思います。自分のことを考えた上で、今度は他の人とどんなつながりを持つべきものかも考えるようになるだろうし、自分の生態環境でもある社会的な、精神的な「溜め」もよく機能してくれるでしょう。そうした中で、自分と周り、そして世界とのつながりに目を向ける余裕が出てきて、自分がどちらに向かって歩いていくべきかということも自然に定めていけるでしょう。自分を失わない人は世界を見つめて考えることができると思います。世界がどうなっているかということを考えられる人は、今度また無意識的に自分の行動基準や人間関係、アイデンティティーの形成に注意を払うはずで、こうした生態環境の良性循環の中で、人は心身ともに健康でいけるのではないかと思います。

4. 学習者の考察のテキストに基づく学習

これは、上記「対話的問題提起学習」、「ロールレタリング」、「4つの問いを考える」で、他の学習者が「考えたこと」として示したものをテキストとして使用し学習するものである。「対話」のメモ、考察、「ロールレタリング」の手紙、「4つの問い」で示されたものをテキストとして取り上げ学習する。

グローバル化の変動の下での事態の捉え方は世代によって大きく異なる。ケースによっては、異なる世代では異なる世界を見ているといってもよい。「視座」が違っているのである。

そのような中、自分なりの考え方、見方の枠組みを形作るための「レラヴァンスポイント(relevance point)」として、同じ世代の学習者の「考えたこと」は、文字通り「かけがえのないもの」である。

自己も、「対話」のメモ、考察などを提供することによって、そのようなポイントを提供することで、他の人に寄与する。自・他が互いに「レラヴァンスネットワーク(relevance network)」を形作ることで、一要因、一側面に依拠して考えることを避け、「つながりの形をしたもの」の見方、考え方を育成することを図る。

III. 持続可能性日本語教育のプロジェクト活動における学習のデザイン

この活動は、グローバル化の変動の下にある世界のコト、モノ、人のつながりについて、自己を起点とし、自己との関連を見出しながら、持続可能な生き方を考えていくプロジェクトを手がかりとして進める活動である。

1. グローバル化の変動の下にある自国の状況について知るプロジェクト

このプロジェクトは、学習者参画に基づいて作成されたテキスト、教師から与えられる日本語で書かれた日本或いは世界の雇用の状況、および解説、雇用を入り口とした経済的なつながりなどについて読み、考えていくものである。教師から与えるものを用いる場合には、それに先だつて、自国の学習者参画に基づくテキストで、各自が直近に直面している問題について読み、書き、考え、対話、ロールレタリング、4つの問いを考える活動の後に行う。

2. 各地域の同世代人について知るプロジェクト

自国以外の地域の同世代人が現在直面している状況に関するテキストを出発点として読み、考え、書き、話す作業をする。同じように対話、ロールレタリング、4つの問いについて行う。テキストとしては学習者参画に基づくテキストのうち、他国のものを用いて行う。自国以外の地域の一つとして日本を取り上げ、日本語で書かれた日本で出版された新聞記事や出版物などを用いる場合もある。ただしこのケースでもあくまでもまず自国の状況を上の形で進めた後、それとの関係で自己を起点として進める。ポイントは、単なる読解ではなく、あくまでも自分を起点としてつながっている人々がどのような状況に置かれてあるか、そしてその下で持続可能な生き方とは何かを考えるものである。

次の例は、日本人大学卒業生のケースのテキストと、それについて中国人日本語学習者が行った対話的問題提起学習の例である。

テキスト

3年前の卒業生である。

就職氷河期には珍しく、しっかりした企業に就職が決まった。最初、通勤時間2時間ほどかけて自宅から通った。

学生時代ほとんど知らない世界だった。一つ一つの仕事が新鮮だった。みっちり準備をして顧客とやり取りを進めるのも緊張感とやりがいがあった。

新入社員の自分だけでなく、多様な業務の内容をこなすためどの社員もそれぞれスケジュールがぎっちり詰まっていた。それぞれの顧客への対応業務の準備、事後の整理、その報告、プレゼンに際限なく時間がかかった。仕事の全体像が見えないこともあり、少し先まで計画的に進める学生時代までのリズムではなかった。通勤時間が長すぎた。

社宅に入ることにした。東京での一人の生活が始まった。家族から離れて暮らすのは別世界に住んでいるような感覚があった。通勤時間がカットできた分やり残して帰宅することは減った。仕事はますます面白くなった。

他の新入社員たちと同様、別々の出向会社に出た。配置されたところは部屋も広い本社とは違って、驚いたことに、窓のついていない手狭な部屋だった。人の出入りが余りない分、仕事に集中できた。最初は気にならなかった窓のない生活は次第にこたえるようになってきた。

朝7時頃社宅を出て会社に着いてから、文字通り深夜会社を出るまで、時計は見れば何時であるか頭ではわかる。朝日にも触れずに一日中ずっと蛍光灯の下で仕事をしていると、体の方では、今いったい何時頃なのか分からない。午前を終わらせているのか、夜になっているのかさえはっきりしない。食事は2食分社前に駅で買っておく。外に食べに出て、注文して出て来るのを食べ終わって戻る時間がカットできる分、かなりの仕事が見込める。一日中、時によっては三日四日、面と向かって人と話もしないことが続くような毎日だった。

本社とは別の種類の業務だった。別ではあったが、本社でやっていた一つ一つがどうつながっているかはつかめてくる気がした。睡眠時間が切り詰められたのと、週末ゆっくり休む時間が取れないこと、人との接触がないことから、この先これが続くと思参など思い始めた頃、本社に戻るよう言われた。

戻った本社はさすがにほっとする気がした。別の仕事をしてみて、以前やっていたことはずいぶん手際よく進み、詳しいことも何となくこなせるようになった。その分、周りの先輩たちの様子が目に入るようになった。

気になったのは30代の後半から40代にかけての先輩たちだった。考えてみれば、若い人間の多い世界だった。その中で比較的少ないこの年代の人たちは、ずいぶん疲れているように見えた。仕事は依然として面白かったし、閉じ込められているような毎日から解放されてばりばりやっていると言えた。ただ先輩たちの様子を見ると、このままずっとこの職業であのくらいの年齢までやっていくのかなど言う気持ちがよぎった。本社に戻って楽だったが、仕事がわかるようになった分欲張ったかも知れない。8月になって体調がおかしくなった。下痢が激しくなった。10日前後にダウンした。次の日は何とか会社にたどりついて、無理かなと思ったものの夜12時頃までやって、社宅に戻った。

次の日は起きられなかった。夜中から下痢の繰り返しだった。会社に入社以来、初めて欠勤の電話を入れた。電話に出たすぐ上の上司から、「今日は上司に説明しなければならないので、必ず出てもらわないと困る」と言われた。とても家から出て電車に乗るまでたどり着けそうもなかった。

「下痢が激しくて仮に出社しても満足に説明することができそうもない」とありのままに言うと、少しでも良いのでとにかく出て来るようにと言われて、結局行った。

部長含めた幹部と話している最中に気分が悪くなった。脂汗が出て来た。こらえきれなくなって、周囲に断り、トイレに行こうとした。廊下に出てしばらく歩いて目の前が暗くなった。気がつくとき救急車の中だった。即刻入院だった。

次の日一日病院にいた。お盆の翌日、会社に辞表を出した。

実家に戻った。家族はそれでも、正しい判断をしたと受け入れてくれた。

自分が失業保険などというものに縁があるとは思ってもみなかった。しばらく保険で生活することになった。心底参った。参ったが、ここまで落ち込んでみると、高校以来の友達へのメール、電話での励ましは暗澹たる毎日の中で心からの救いだった。

友達に救われた。しばらくゆっくりしようと思った。暗中模索そのものの不安の中にいた。

[中国人日本語学習者による対話的問題提起学習]

文章を読んでちょっと驚いた。やっとなつかんだ仕事、しかし、厳しい生活、山ほどの仕事に疲れ、体調を崩し結局会社を辞めてしまうという内容。私（中国人日本語学習者）はこの文章を読んでいろいろな疑問を持った。そして、他のふたりとこれに対する考えを話してみた。

自 分

- ・本当に仕事の疲れで会社をやめたか。それとも、冷たい会社だと思ったからなのか。
- ・会社の仕事は本当に耐えられないほどだったのか。
- ・他の同僚はどうやって克服してきたか。彼らも辞めたか。
- ・仕事のストレスを解消する方法はなかったか。
- ・体調を崩したのは会社だけの問題なのか、本人には責任がないのか。
- ・例え食べる物もない、職場もないアフリカの人に比べたら幸せだと思うが、これぐらいの苦労は克服できないのか。
- ・不満をずっとかかえるより満足度をちょっと低めにしたら、十分幸せを感じるのではないか。

相 手	
楊さん（中国）	呉さん（中国）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 休暇を取って、休んでから仕事に復帰したほうがよいんじゃないか。 ・ 職場で楽しい事はなかったか。 ・ 健康に対する責任はなかったか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 誇りだと思って、一生懸命仕事して自分知らずのストレスを解消できなくて、会社を辞めたかな。 ・ コミュニケーションが欠いていたんじゃないか。 ・ 冷たい会社の対応で辞めていいんじゃないか。
考 察	
<p>私と楊さんは会社を辞めるべきではない、呉さん辞めても良いんじゃないかと意見が分かれた。もちろん、日本の雇用制度など直すべきところがあるし、冷たいと感じる職場もあると思う。しかし、社会がどんどん変化するなかで自分も変えなければ社会に見捨ててしまうかもしれない。自分の口に合う職場なんて数少ない、如何に努力し、仕事をする中で楽しみを感じ、融和に会社の同僚たちとコミュニケーションをしながら、ストレスを解消するのも必要であると思う。自分の心境を整え、いつも不満まではなく、基準値を低めにして、満足感を味わうのも悪くはないと思う。</p>	

3. 日本の同世代人について知るプロジェクト

この10年間に日本人の若者世代に起きていることを示す個人のケースを取り上げたテキストを日本人学生が読んで、対話的問題提起学習やロールレタリングをした結果残した記録を、別の日本語学習者が読んで行うプロジェクトである。テキストは、就職氷河期以降の若者の雇用に関わる体験が記された新聞記事やテレビ番組の文字化したもの、若者の雇用に関する書籍の中に取り上げられている特定の個人の辿った経験を書いたものを取り上げる。その意味では、前節で取り上げた中国人日本語学習者の対話のもととなった日本人大学卒業生のテキストについて日本人の学生が行った対話的問題提起学習、ロールレタリングを行った結果テキストとして用いて新たに、日本語の学習者が対話やロールレタリングを行う。日本人の同世代人が自国の同世代人の若者の現在の状況に対してどのように考えているか、対話やロールレタリングでどのようにそれを表明しているかを、日本語学習者が、日本人の若者に関して自分たちが行った対話やロールレタリングの結果とどう違うかを比較し、考えを深めるものである。

このような個人のケースの背景にある状況を考えるために、新聞記事で取り上げられる日本の若者の雇用における流動化や、その下で現実にはどのようなことが進行しているかに関する新聞記事や書籍をテキストとする対話的問題提起学習も平行して行う。

4. 世界の変動と自分を結び付けて考えるプロジェクト

グローバル化の下にあるこの10年の世界の急激な変動の中の出来事と自分がどのような関連にあるかを考えることを目的とする活動である。典型的なケースはアジア通貨危機の時に自分がどんな経験をしたか、またその少し前に起こったソ連の崩壊当時、旧社会主義圏で国営企業が民営化されたり、配給だった食糧が個人で入手しなくならなくなったために起きた過程で、自分がどんなことを体験したか、どんなことを感じたかについて思い起こし、それを話し、また文章化するものである。次の文章はアジア通貨危機のケースを体験したことを述べた中国人日本語学習者の例である。

[アジア通貨危機と私 (1)]

アジア通貨危機が起こった時に、小学生だった。田舎に住んでいた。何も知らなかった。父親は、大工であって、自分の村で働いていた。ある日、父の友達は家に来た。おじさんは、父を、烟台（家から近い町）へ働きに誘った。それから、おじさんと一緒に「民工」として烟台に行った。

その後、ますます多くの村の住民は大都市に流れ込んだ。村の中に若い男性がますます少なくなった。更に、いくつかクラスメートも退学して、親に連れて、「民工子弟」として都市へ行った。親方になったおじさんも会った。

大きくなったこそ、分かるようになった。彼らは苦しい生活をしていた。これは「社会福祉事業の民間移行策」が進んだからだ。

さらに、次の体験談はアジア通貨危機の際、母国で体験したことを記録したマレーシアからの女子留学生のものである。

[アジア通貨危機と私 (2)]

出身地のマレーシアはタイの隣にある。タイ通貨危機の影響はもちろんあった。特に1997年の末から2000年までは大きかった。当時一定の職場で働くことが出来ず、何回も転職した。リストラされることもあった。それまで頑張ってきた目標を一瞬にして潰され、どう未来に進んでいいかが分からなくなった。マレーシアでは、タイやインドネシア、バングラデシュから外国人労働者が殺到している状態であった。

その時、あるレコード会社で働いていた。タイの通貨危機後しばらく、最初は何事もなく普通に生活していたが、だんだん状況が悪くなって企業や銀行が続々倒産し、失業者もたくさん出るようになった。

そして私もリストラされた。その後、友達の紹介である小さいレコード会社で働くことになった。賃金が低くて毎日夜中の2時から3時頃まで働いて、ついに体を壊した。もちろん仕事も失った。

それからの2ヶ月、仕事が見つからず貯金だけで生活していた。仕事はたくさんあった。ただし、賃金が少ないので一人暮らしの生活には足りなかった。自分の好きな仕事があった。しかし現実それを許さなかった。自分でどうしたらいいか分からなくなった。周りの友達と相談しても、いい結論に至らなかった。周りのみんなの状況もよくなかった。その後、仕方なく私は学校の臨時教師になった。教師は公務員であって政府から保証されているからだ。この一連のことで、私は「世の中は甘くない」、「現実と理想は違う」ということが分かった。

5. 雇用をグローバル化全体の中で考えるプロジェクト

このプロジェクトは、現在自分たちが雇用面で直面していることが、世界全体の変動下にあるコト、モノ、人とどのようにつながっていることなのかについて考えるものである。具体的には、グローバル化の下にある世界変動に関する文献、新聞記事、自分でインターネットで調べたことなどの中で、キーワードと考えるものをリストアップし、それをお互いのつながりを考えて図として表し、自分が直面している雇用が世界の中でどのようなつながりのもとで動いているかを辿るものである。

[雇用をグローバル化のつながり全体の中で考える]

—前掲のマレーシア日本語学習者による—

「雇用をグローバル化のつながり全体の中で考えるプロジェクト」

貿易・金融・資本の自由化／雇用面の変動／規制緩和・撤廃／市場拡大／国際競争力／グローバル化の加速／資本移動／多国籍企業／民営化／教育・医療・福祉／ライフコース／人件費コストを下げる／非正社員／終身雇用の終わり／働く貧困層／水・食糧・資源・環境開発

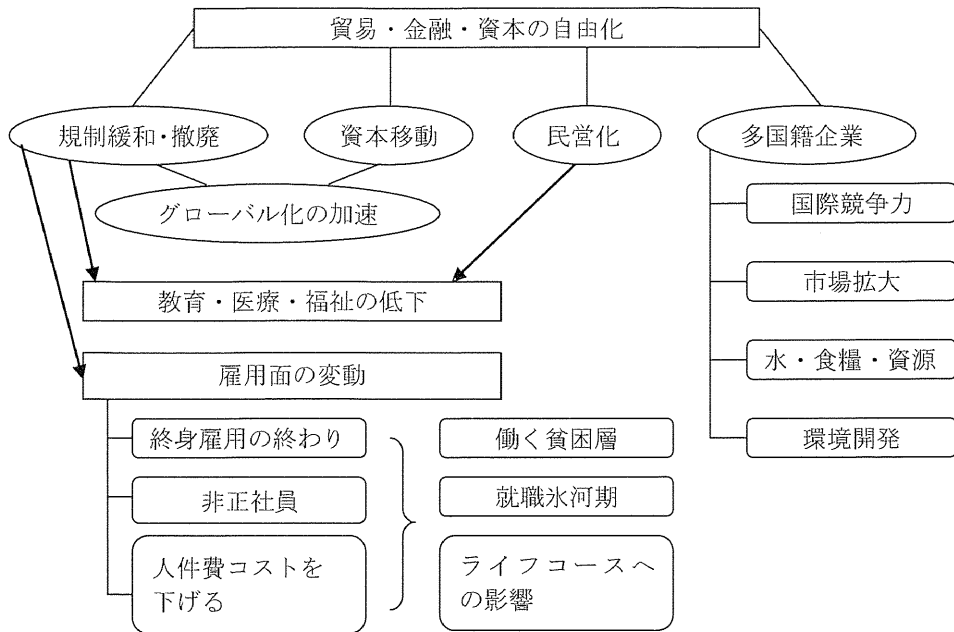


図1 雇用をグローバル化のつながり全体の中で考える

6. 世界のコト、モノ、人のつながりの中の「私」の位置を考えるプロジェクト

先に触れたように、持続可能な生き方の追求は、自己を起点として、直近の未来で直面しようとしている就職や雇用の問題、あるいは食糧の問題などについて自分のこと、自国の状況や人のこと、そして世界の他の地域の同世代人のこと、更に世界のコト、モノ、人のつながりへと辿っていく方向で行う。このプロジェクトは、その一連の活動の途中で一定程度世界のつながりが見えたところで、そのつながりの全体図の中に自分を位置づけてみるものである。先に見た「雇用をグローバル化全体の中で考えるプロジェクト」の結果得られたつながり図の中に「私」（＝自分）の位置を記入することによって行う。

次の例も前節で、雇用をグローバル化全体の中で考えるプロジェクトでつながりを示したマレーシア、留学生が、その後関連した学習活動を行い、文献を読む中で新たに書いた世界のコト、モノ、人のつながりの中に自分の位置を記入したものである。

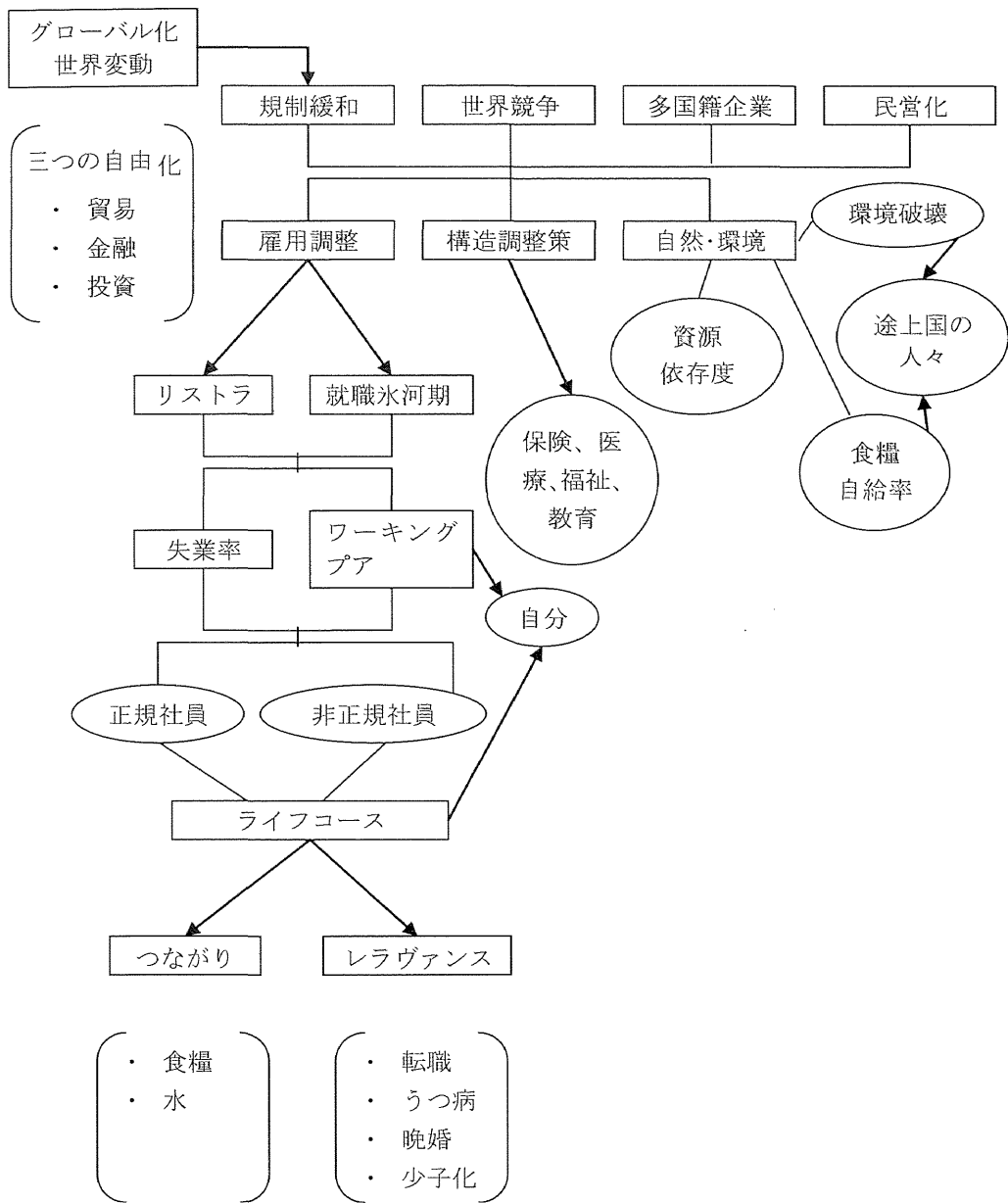


図2 世界のコト、モノ、人のつながりの中の自分

IV. 持続可能性日本語教育の内容面におけるシラバスデザイン

上記の教室活動の諸形態は、次のような内容面でのシラバスデザインに沿った形で行われる。ここでは学習者にとって直近の問題として雇用を取り上げた場合を示す。大きく分けると、1. グローバル化の変動の下にある世界の雇用に関するコト、モノ、人のつながりを見るためのシラバスと、2. グローバル化の変動の下にある世界の中でどう生きるかを考えるためのシラバスに分かれる。内容面におけるシラバスデザインは、この2つのシラバスを複合してらせん的に組み込んで形作られるものである。2番目のシラバスは具体的には先に述べた4つの問いをどのようなステップを辿って進めるかを中心に構成されている。具体的には次のようなシラバス構成となる。

1. 若者の雇用に関何が起こっているか
 - (1) 自国の若者の場合
 - (2) 日本、世界の若者の場合
2. この10年にどんな変動が起きているか(1)
 - 一人、世界への糸口をたぐり寄せる(1)―
 - (1) 若者にとって
 - A. 有期雇用比率の増大
 - B. 20代、30代の結婚・家族
 - C. 「4つの問いのステップ(1)」
 - ―入り口―
 - (2) 正規雇用の若者にとって
 - A. 正規雇用の若者が企業の中で直面していること（「絞り込み」など）
 - B. 若者に急増するうつ病
 - C. 「4つの問いのステップ(2)」
 - ―自発してくる問いをつむぎ足していく―
 - D. 「4つの問いのステップ(3)」
 - ―仮説、仮決定の追認、修正―
 - E. 「4つの問いのステップ(4)」
 - ―当面は、仮決定に当たって、つながりを切らずにいく：「同世代とのつながりの中にある私」を見ていく―
 - F. 「4つの問いのステップ(5)」
 - ―「私、人、世界、自然のつながり」の中で、つながりの持つ「溜（た）め」の一つに私もなる可能性を探る―

3. この10年にどんな変動が起きているか(2)

一人、世界への糸口をたぐり寄せる(2)ー

- (1) アジア通貨危機(1997年)
- (2) 自国を含む各国の雇用面に変動を生んだ通貨危機
- (3) 若者への影響

4. グローバリゼーションとは何か：雇用を中心に

ー世界のつながりを紡ぐー

(1) つながりを紡ぐ

- A. 「つながりを紡ぐ」へのステップ(1)：世界のつながりを紡ぐ
 - ー「なぜ世界はこう動くのか」を考えるー
- B. 生存／棲息のための生態系を育てる
 - ーつながりを紡ぐ中でー
- C. 生存のための情報収集、判断、行動のベースとしての「つながり」を育てる
- D. 自己・自他の生態学的支援システムの自己形成
- E. 自分なりに、自己と同時代の他者への支援システムを作る
- F. 「自己の生存のための（情報収集、判断、行動の）ベース」を育てる
- G. 変動の中での持続的な生き方の追求：つながりの育成の追求

(2) グローバリゼーションとは何か

ー「つながりを紡ぐ」へのステップ(2)：つながりの中にあるグローバリゼーションを辿るー

- A. つながりの中にあるグローバリゼーションを、雇用ー経済の糸口から紡ぐ
- B. 雇用の背後にある経済からつながりを見ていく
- C. 経済面でのグローバリゼーションをしてみる
- D. 経済面でのグローバリゼーション(1)
 - ー貿易・金融・資本の自由化ー
- E. 経済面でのグローバリゼーション(2)
 - ー国際経済機関の任務の拡大：IMF・世界銀行・WTOー
- F. 経済面でのグローバリゼーション(3)
 - ー多国籍企業の拡大ー
- G. グローバリゼーションの、経済面をつなぎ目とした他分野への拡がり
 - ：雇用との接点(1)ーネオリベラリズムの考え方ー
- H. グローバリゼーションの、経済面をつなぎ目とした他分野への拡がり
 - ：雇用との接点(2)ー構造調整策ー

(3) 日本でのグローバル化

5. グローバリゼーションの雇用以外へのつながり

—「つながりを紡ぐ」へのステップ(3)：つながりの拡がりを紡ぎ足していく—

- (1) 環境面へのつながり
- (2) 食糧・水への波及
- (3) 石油ピークをきっかけとする新たなつながり
- (4) 人々へのつながり

6. グローバリゼーションのつながり全体の拡がり、「私」の位置を見渡してみる

—「つながりを紡ぐ」へのステップ(4)—

- (1) 雇用を糸口とした拡がりを見渡してみる
- (2) 「4つの問いを考える」に対応させて考えてみる
- (3) エコロジーの捉え方との関連で考えてみる
—自己の生き方、人との関係、アイデンティティが、つながりの中であって選択され、
形作られていく、という視野—
- (4) 雇用をグローバル化のつながりの中で考える
- (5) 「4つの問い」再考
- (6) グローバル化のつながりの拡がりの中での「私」の位置を考える
- (7) 私の「生き方を考える方法論」：「その中でどっちに向かって歩んでいくか」の問いを深める
—私の「生き方を考える方法論」を考える：私の幸福論を考えてみる—
- (8) どんな生き方が模索されているか
- (9) 持続可能な生き方追求の基礎
—「私の幸福論」、「私のリスク論」を、つながりを紡ぐ中で鍛えていく—
- (10) 雇用に関わる4つの問いの答えを文章化する

V. 持続可能性日本語教育における教師の役割

1. 「教育とは教師の教育である」

先に触れた環境教育・開発教育における長期の課題として、取り上げる学習対象となる事象が学習者にとって「他人（ひと）事」のレベルを超えることの困難について論じた（岡崎2008 a）。この課題に対するこれまでの取り組みの中で明らかにされたことは、まずは学習者に先立って教師自身が「暖衣飽食」の中で生活しており、「南」諸国の貧困や飢餓の諸状況が他人事になっているという根本的な問題を抱えていたということであった。その意味で環境教育と開発教育のこの長い苦闘の歴史の課題を引き継ぐ持続可能性としての言語教育、またその一つである日本語教育は、教師自身の対象事象に対する関わり方の見直しということを出発点に据える。具体的には、教師にとっても他人事である、ある意味でトップダウンとして提示されたものを、学習者にもまたトップダウンとして教育を進める点の克服である。すなわち、教師自身が現在の世界

のグローバル化の変動の下での生き方を追求することを視座として持ち、それを教育場面でどう組み込んでいくかを考えることを端緒とする。その具体的な教師の捉え方が「同行者としての教師」である。

2. 同行者としての教師

冒頭で述べたように、特にこの10年アジア通貨危機(1997年)以降のグローバル化の変動の加速状況においては、親の世代ばかりではなく、教師もまたそれ以前の終身雇用、一億総中流の下でのライフスタイルやものの見方、感じ方の中で生活史を辿ってきている。その意味ではアジア通貨危機の翌年1998年に日本の自殺者の人口が3万人に達して以降、少なくとも2010年現在で一度も3万人を割らない状況になっていること、あるいはうつ病等の病気が広範に存在し始め、それがこのような世界的な変動の下で平行して諸年齢層、特に若者の年齢層に急増している状況が何によってもたらされているかについて明確な見通しを持って語ることは、当初は困難であるといえよう。その中で自らも生き、子を育て、そして教育に当たり、今後のライフコースを辿ろうとしている教師自身が、どのような生き方が自分自身、家族、そして学習者を含む人々にとって持続可能な生き方なのかについて見通しを求め、辿りつつある過程にあると言えよう。

そのような辿りつつある過程を学習者とともに進む、その意味で「同行者としての教師」であることをベースとすることが、持続可能性としての日本語教育における日本語教師の役割の根源である。

そこにはトップダウンとして示す何かがあらかじめ存在していない。また、もはや今の変動の状況は教師自身および自分の家族、子どもたち、そして学習者にとって他人事ではない。そのような状況のもとで、日本で育ち生活してきた自分と、世界の各国それぞれの国で生活している学習者それぞれの視点から見た世界がどのようなものであり、自己を起点としてそこにどのようなつながりを見出していくか。その下でどのような生き方をしていくか、また他の人とどのようなつながりを持っていくかを、このような世界に生きる私とは何かを考えつつ進む過程を分かちもつ同行者である。

3. 同行者だが、「まず隗より始める」ものとしての教師

そのような同行者としての歩みをまず持って、自分自身はその生き方について最大限模索し考え、他の地域に生きる学習者を始めとした人々の様相を知り、彼らから学び、そして考えていくための先陣をなす、すなわち「まず隗より始める」ものとして始めていく。「同行者としての教師」とは、このようなものとして対象事象と学習者に関わる教師を目指すものである。

4. 言語を「孤立した実体」から、人間活動と一体化したものとして捉えるものとしての教師

先に触れたツールとしての言語教育においては、言語は具体的な学習者の携わっている生活上の諸活動と一体化した活動の一部としてよりは、むしろ英会話能力をビジネスのために身につける形、あるいは受験勉強のための英語学習に典型的なように、人が生きて生活することとは切り

離された、またはそのごく一部だけを構成するものとして言語を習得する「孤立した実体としての言語」（岡崎2005c）の習得が目指されるものであった。これに対して内容重視の言語教育、とりわけ持続可能性としての言語教育においては、学習者が自分自身の直近で直面する雇用や食糧など生活の課題の中で、そこに影響している世界の変動の諸様相を捉え、つながりを把握し、どのように生き、他の人とどのようなつながりを持ち、そしてそこに見出す自分をどのような人間として捉えるかを考えていくものである。言語活動を、そのような内容について考える一連の人間活動と一体化した活動として進めることを前提としたものである。教師は、教師自身が人間としての活動と一体化して関わる同行者としての教師の捉え方に典型的なように、言語活動を、孤立した実体から人間活動と一体化した活動へと高めていく一つの主体である。

同時にこのような追求は、ツールとしての日本語教育では、教育現場での活動に限定されがちな教師のあり方に起因する「教師の人間としての全体的な活動と日本語教育の分離」の超克という意義も持っている。教師活動が人間としての活動であると位置づけられるがゆえに、その人間的な活動である言語活動を形作っていく持続可能性教育としての日本語教育は、人間としての生き方と教師職両者を一体化した教育として追求されていくものである。

VI. 結語

本論は、前稿（岡崎2009a）で考察した次の3点のうち、3の日本語教育で実現する具体的活動として取り上げた、「学習者調査」、「学習者参画に基づくテキスト作成」に続く持続可能性日本語学習のデザインの目指す全体像を明らかにすることを課題として設定した。本論はこの課題をめぐって、

1. 持続可能性日本語教育のテキストベース活動における学習のデザインとして、4つの活動：「対話的問題提起学習」「ロールレタリング」「4つの問いを考える」「学習者の考察のテキストに基づく学習」
2. 持続可能性日本語教育のプロジェクト活動における学習のデザインとして、6つのプロジェクト：「自国の状況について知るプロジェクト」「各地域の同世代人について知るプロジェクト」「日本の同世代人について知るプロジェクト」「世界の変動と自分を結び付けて考えるプロジェクト」「雇用をグローバル化全体の中で考えるプロジェクト」「世界のコト、モノ、人のつながりの中の「私」の位置を考えるプロジェクト」
3. 持続可能性日本語教育の内容面におけるシラバスデザインとして二つのシラバス：「グローバル化の変動の下にある世界の雇用に関するコト、モノ、人のつながりを見るためのシラバス」「グローバル化の変動の下にある世界の中でどう生きるかを考えるためのシラバス」
4. 持続可能性日本語教育における教師の役割として「同行者としての役割」を、それぞれ具体的に提示し考察した。

尚、最後に以上を、先行の諸論考とを統括して捉え直すと、以下のようになる。上で述べた教室活動とシラバスデザインの基礎として、次のような生態学的思考に基づいて持続可能な生き方

とは何かを学習者と教師がそれぞれ考えていくのが、持続可能性教育としての日本語教育の基礎となるアプローチである。これを言語教育における生態学的アプローチと名づける。生態学的アプローチ（岡崎2007 a）は次のような生態学的思考（岡崎2008 c）に裏付けられて進めるアプローチである。

1. コト、モノ、人のつながりを自分なりに紡いでいく
2. 単一要因思考を注意深く避け、つながりの中に世界と人、自分自身を見る
3. 自分の生き方とつなげて事態や世界を見る
4. 事態の「本当の姿」は自分の生き方とつなぐ時見え始める
5. 自己を起点としてコト、モノ、人のつながりを紡ぎ、「その中で見えてくる世界とその意味、その世界のつながりを形作る自己とその意味」という捉え方によって、自己と世界が互いにつながりの中にあると考える
6. 自分の視座を意識化することにより、他の人の視座での思考を自分とつなげる
7. 「世界はどうなっているか」で見えてくるつながりをコンテキストとし、その中で認識し、判断し、行動する
8. 解決の姿、形はつながりの形をしている
9. 自分も新たなつながりを形作る

このようにして生態学的思考に基づいて認識し判断し、行動する中で形作られていくものを生態学的リテラシー（岡崎2009 b）と呼ぶ。持続可能な生き方を追求する日本語教育の下では、ツールとしての日本語能力の養成と共に、この生態学的リテラシーの育成が内容面での目標とされる。

次の課題として、グローバル化の変動の下におけるライフラインとして、雇用面と共に基軸をなす食糧面両者を合わせた全体を内容とする展開が必要とされる。

参考文献

- 岡崎敏雄. 2005a. 「言語生態学原論—言語生態学の理論的体系化—」『共生時代を生きる日本語教育』凡人社、503-554.
- 岡崎敏雄. 2005b. 「言語生態学に基づく言語政策研究—言語の生態・機能・福祉と言語政策—」『筑波応用言語研究』12, 1-4.
- 岡崎敏雄. 2006a. 「言語生態学における心理・社会的両生態領域間の相互交渉的關係—『巨視的モデル』の生態学的位置づけ—」『筑波大学地域研究』26, 15-26.
- 岡崎敏雄. 2006b. 「言語における心理・社会的両生態領域間の相互交渉的關係—『巨視的モデル』の生態学的評価—」『筑波大学地域研究』27, 15-27.
- 岡崎敏雄. 2006c. 「外国人年少者日本語教育の基礎としての言語政策研究—スウェーデン言語政策の言語生態学・動態分析」城生佰太郎博士還暦記念論文集委員会編『実験音声学と一般言

- 語学』東京堂出版、538-547.
- 岡崎敏雄. 2006d. 「言語生態学の基底次元をなす学としての言語福祉学の展開—言語・言語話者の福祉の政策の要としての言語政策の分析—」『筑波応用言語学研究』13, 1-12.
- 岡崎敏雄. 2007a. 「持続可能性を追求する日本語教育—その基礎としての言語教育における生態学的アプローチ」『筑波大学地域研究』28, 67-76.
- 岡崎敏雄. 2007b. 「地域社会の国際化に果たす大学の役割—グローバルな視点とローカルな視点—」『留学生センターシンポジウム2006 地域社会の国際化に果たす大学の役割 報告書』5, 7-16 茨城大学・宇都宮大学留学生センター
- 岡崎敏雄. 2007c. 「情報生態学原論」『筑波応用言語学研究』14, 1-14.
- 岡崎敏雄. 2007d. 『外国人年少者の心理・社会的要因が日本語学習言語の習得に及ぼす影響の研究』平成16—18年度科学研究費補助金研究基礎研究（C）課題番号16520312.
- 岡崎敏雄. 2008a. 「持続可能性教育とその要としての言語教育のためのカリキュラム論—アクロス・カリキュラムのデザイン—」『文藝言語研究 言語篇』53, 17-32、筑波大学
- 岡崎敏雄. 2008b. 「言語習得・認知科学研究両成果の生態学的展開に基づく日本語教育方法論」『筑波大学地域研究』29, 129-141.
- 岡崎敏雄. 2008c. 「グローバル化の下で変動する世界における言語生態学の課題—持続可能性言語教育原論—」『筑波応用言語学研究』15, 1-14.
- 岡崎敏雄. 2008 d 「言語教育の生態学的アプローチ—言語生態学に基づく言語生態系の育成：中国語母語話者の場合—」363-371『日本語言研究』精華大学出版社
- 岡崎敏雄. 2009 a 『言語生態学と言語教育—人間の存在を支えるものとしての言語』凡人社 1-264
- 岡崎敏雄. 2009 b 「持続可能性教育としての日本語教育—課題の克服とその具体的形態—」『筑波大学地域研究』30, 1-16
- 岡崎敏雄. 2009c 「持続可能性教育としての日本語教育のデザイン—生態学的リテラシーの育成—」『文藝言語研究 言語篇』54, 1-16、筑波大学
- 岡崎敏雄. 2009 d 「生態場における生態学的意味の生成—第一、第二段階の生成—」『筑波応用言語学研究』16, 1-14.

Creese, A. and P. Martin. 2003. *Multilingual classroom ecologies: Interrelationships, interactions and ideologies*. Cleavdon: Multilingual Matters.

Hornberger, N. H. 2002. "Multilingual language policies and the continua of biliteracy: An ecological approach," *Language Policy*, 1, pp. 27-51.

Kramsch, C. 2002. *Language acquisition and language socialization: Ecological perspectives*. London: Continuum.

Mühlhäusler, P. 2000. "Language planning and language ecology," *Current Issues in Language Planning*, 1(3), pp. 306-367.